

THE CITY OF YOKOHAMA

歴史を生かしたまちづくり

横濱新聞

第9号

平成7年(1995年)2月25日発行
企画編集・発行:横浜市・横浜の歴史的資産調査会
事務局:財団法人はまざん産業文化振興財団内
〒220 横浜市西区みなとみらい13-1-1
TEL.045-225-2171 FAX.045-225-2172



旧安西家住宅主屋

長屋門公園に甦った歴史体験ゾーン 稲葉和也

(東海大学助教授・横浜市歴史的資産調査会調査委員)

●瀬谷区阿久和町は相鉄線三ツ境駅近くの住宅地。その一画に、今なお森に囲まれ、谷から湧き出る水が小川となり、野鳥の囀りが溢れる長屋門公園がある。公園の入口に2階建の長屋門があることから、その名称が付けられたのだが、実はこの公園一帯はかつて地元の家大岡家の屋敷地であった。数年前、市が同家から借地して公園計画を始めた頃は、雨水で溢れた小川は洪水のようになり、長い間放置された屋敷は竹林や木々で覆われて暗く、まさにジャングルであった。入口の長屋門と土蔵、竹が床板をぶち抜いて傾いた文庫蔵があったが、主屋は30年も前に取り壊されていた。しかし、隣の泉区の旧家安西家から主屋が譲り受けられることが決まったことで、この公園建設のコンセプトはできあがった。両家の古い文化遺産が巡り合うことで、公園の核となる歴史体験ゾーンとして甦ることになったのである。

長屋門は明治20年に建てられたものだが、当時養蚕が盛んで、2階建として蚕室にも使用した。江戸時代には限られた名主しか建てるのが許されなかった長屋門は、維新後には輸出の花形であった生糸生産のシンボルとなったのである。

大岡家の祖先は、維新後いち早く製糸業に目を付け、明治10年には桐生や信州の先進地帯を回って準備をし、22年には主屋を建て替え、3~4層建てにして養蚕を行っている。そして、23年、隣家の北井家と共に製糸工場「改良合名会社」を興した。この会社の創立は市内では2番目に古く、職工(女工)の数も150人を越す規模であった。工場の敷地は長屋門の門前、北井家の前であったが、今ではその跡も窺われない。

安西家は和泉村の名主を勤めた家であったが、その主屋も養蚕のために改造されて、間取りは喰違い四ツ間取りとなり、天井も低くされていた。しかし、調査してみると、三ツ間取り広間型と呼ばれる、江戸中期までの典型的な間取りであったことが判明し、復原に際しては、この三ツ間取り広間型を採用した。広い土間と囲炉裏が切られた開放的な広間、そして太い柱と高い梁組は、訪れる人々に安堵感を与えてくれる。

この新しく甦った歴史体験ゾーンの管理運営は市民に委ねられて、自主的に様々な行事や教室が催されている。開園して今年3年目を迎えることになるが、市民生活の中すっかり溶け込んだように見受けられる。

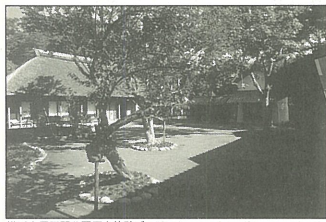
[写真撮影 米山淳一]



旧大岡家長屋門

甦った横浜の原風景

横浜市長屋門公園歴史体験ゾーン



横浜市長屋門公園歴史体験ゾーン

瀬谷区阿久和町に横浜市長屋門公園がオープンしたのは平成4年7月。オープンから2年半以上が過ぎた現在、地元の方々が組織している歴史体験ゾーン運営委員会が主催するさまざまな催し物が好評だ。噂を聞きつけて遠方から訪れる人も多く、この種の施設としては異例ともいえる来館者数を記録している。その数は来館者名簿に記名されるだけで月平均2,500人を数える。

公園の名称の由来ともなっている旧大岡家長屋門は、この地域の人人に親しまれてきた明治20年(1887年)築の建物で、平成2年3月には横浜市「歴史を生かしたまちづくり要綱」に基づく歴史的建造物として台帳に登録されている。この長屋門は公園整備に先立って大岡家から横浜市に寄贈されたが、残念なことにはこの敷地にあったはずの主屋(しゅおく)は、消失してから時間が経過しており、大岡家住宅の往時の姿は詳らかにされていない。

公園計画の策定に際して、横浜市政局建設課は地域の特性を反映した個性豊かな整備を目指す「特色ある公園づくり事業」の方針に沿って計画を進めることとし、地域住民の声を反映させること、谷戸の入口という場所の特徴と自然環境を生かしながら、残された長屋門や土蔵を活用すること等を目標とした。具体的には、長屋門を正面に据えたかつての住居跡一帯を「歴史体験ゾーン」として位置づけ、消失している主屋を補い、古民家の全体的な佇まいの再現を試みることにした。このため、このゾーンについては「歴史を生かしたまちづくり事業」を進めている同都市計画局都市デザイン室と共同で計画を進めることになった。

こうした折、平成元年3月に「歴史を生かしたまちづくり要綱」に基づいて台帳に登録されている江戸時代中期の築と思われる茅葺きの古民家が、やむを得ず解体されるという情報を得て、横浜市は早速所有者の安西実さんを訪ね、長屋門公園計画への協力をお願いした。安西さんはこの申し入れを快く承諾してくださり、旧安西家住宅主屋は横浜市に寄贈され、泉区和泉町から瀬谷区阿久和町に移築されることになった。長屋門公園歴史体験ゾーンには、いよいよ長屋門と主屋が揃うことになったのである。

長屋門と茅葺きの古民家。その2棟の間に広がる庭とその庭の土蔵や井戸。湧き水のせせらざと野鳥の声。囲炉裏ではげざる薪の音。ヘッツイで炊かれる飯の香り。茅の虫退治に欠かせない囲炉裏の煙で少し焦った空気。子供達の屈託のない笑顔と歓声。そして、運営委員会とボランティアの方々による肌理細かく暖かい運営。こうした、人と「もの」が織りなす豊かな時間の流れは、ここを訪れる人々を遠く懐かしい時間旅行に誘う。

この空間はいつの間にか阿久和町の風景に同化し、横浜の原風景を甦らせている。

●長屋門公園歴史体験ゾーン

今後の自主事業計画(平成7年3月~平成7年6月)
3月=ひな祭/人形劇公演/フリーマーケット/菜の花とこぶしの花祭
4月=竹の子祭/みどりの日/春の観覧会
5月=子供の日/柏餅をつくろう
6月=七夕飾り

●定期事業

毎月末の土曜日=長屋門寺子屋開講
第2・4木曜日=刺繍教室
第1・3木曜日=木彫り教室
毎週土曜日 =阿久和齋子教室
毎週水・土曜日=長屋門文庫

●その他

ギャラリーで作品展示会等を随時実施



旧安西家主屋 囲炉裏



庭の井戸からは今も水が出る

旧安西家住宅主屋

旧和泉村は、講中が「ダイ」と「ヤト」に分かれており、前者は台地の村落を、後者は谷戸の村落を意味している。安西家の屋号は「ダイのサクエモン」で、これは「台地の作右衛門」である。現在の安西家は、本家「長左衛門」の2代目(元禄8年/1695年没)頃に分家したようで、現当主で13~14代を数える。安西家は、当家所蔵の「相模園村高控帳」(天保11年/1840年)には、和泉村の名主「安西作右衛門」の名が見られるので、江戸時代後期に名主だったことは確かだが、いつ頃まで遡るかは詳らかではない。

主屋の規模は、現状で桁行9.5間、梁間4.5間で、かつてはドマの南側に3間ほど桁行が伸びて、作男や作女の部屋やウマヤがあったといわれる。移築前の主屋は西向きに建てられていたが、復原に際しては南向きにされた。

移築前の間取りは右勝手ドマと噴煙い四ツ間取りになっていたが、ウラザシキに幅1間のオシイタ(押板)の痕跡が見られることから、かつては三ツ間取りヒロマ型の間取りであったことがわかり、復原に際しては押板と大型の囲炉裏も再現して三ツ間取りヒロマ型とした。



旧安西家主屋 ドマ

痕跡には使用されなかった仕口や喰い違いのあるものも多く見られ、安西家住宅の壁として建てられる以前にその前身の時代があったことを示しているが、伝承によってもその場所等は明らかにされない。

ドマは桁行4間と広く、オオド(大戸)近くにフロバやミノバヤ、奥の南側に大釜、ヘッツイ、ナガシ、張り出しの床があり、カッチェとなっていた。ドマの3本の構造柱とザシキ境の3本の柱は相応しており、上部の梁を受ける古い形式を示している。

ザシキは、桁行2.5間、梁間4間のヒロマであった、かつてはオクとナンド境に幅1間の押板(床の間の前身)があって、その前にイロリが切られていたらしい。このヒロマ型の間取りは、江戸時代初期から中期の終わりまで続いた形式だが、当家の場合は一般より大きく格式を示している。

オクは10畳の客室敷で、東側に床の間、押入、仏壇が並び、ナンド境は壁で仕切られて、ヒロマ境にもかつては柱があった。現在は差し欄が入り、柱が除去されている。

構造を見ると、折置組で四方下屋構造をとり、柱間も1間おきを原則とするなど、古い形式を保っている。

建築年代を明らかにする確実な史料は発見され

ていないが、建築の形式から判断して江戸時代中期末から後期初めの18世紀末頃と推定できる。判断の理由としては、形式は古いが、土間境に並ぶ3本の柱は側よりも太くなり、大黒柱的扱いが見られるなど、江戸時代後期の特徴がうかがえることになっている。さらに、解体時に大黒柱近傍に埋まっていたトックリが発見されたが、このトックリの製作年代が天保年間頃まで遡ることからも、安西家住宅の主屋として和泉村に建てられた時期は天保年間頃と推定できる。

[資料:長屋門公園古民家移築復原報告書 他]

旧大岡家長屋門

長屋門は門構えの両側に長屋を付加した形式の建物で、江戸時代には武家屋敷の門として建てられ、長屋部分には下級武士が住んでいた。また、農村では名主などにも建築が許され、高い格式を表すシンボルでもあった。

明治以降、自由に建築できるようになると、富裕な農家が長屋門を構えることが多くなった。大岡家の長屋門も、製糸工場の経営によって得た富の象徴として建てられたと考えられる。

建築年代については、明治17年に計画され翌明治18年に着工。途中で中断などもあって明治20年(1887年)に竣工したと考えられる。

規模は、桁行6間、梁間9間で、木造2階建(一部平屋建)で、1階は中央部に通路、西側に土間、東側に床上3室間取りとなり、南側より8帖間、4帖間、さらに平屋部分に玄関と板敷きの土台が続く。北東角は便所となる。中央通路部分の開口は2.5間で、2階への階段は4帖間の中央通路側に設けられる。2階は板敷きの1室となり、養蚕室として使用された。西側の土間の上部は吹き抜けとなり、2階への荷物の揚げ降ろしに供されたという。1階中央通路東側は、初期から座敷として使用されていたらしい。

隣接する敷地は、長屋門の建築時に取り込まれたと考えられ、建築年代は長屋門より古いものと思われる。

庭の文庫蔵は建坪6坪の総2階建て、入念な施工から判断して、長屋門より新しく、明治後期の建築と推定される。

[資料:長屋門公園古民家移築復原報告書 他]



旧大岡家長屋門

所在地=横浜市長屋門公園阿久和町393番地

入園料=無料

休館日=歴史体験ゾーンのみ

火曜日/金曜日(祝日の場合は翌日)

年末年始(12月28日~1月4日)

時間=午前9時開園~午後5時閉園

交通=相模鉄道「三ツ境駅」から徒歩15分

同駅から神奈中バス戸塚行「上阿久和」

下車徒歩3分



『ムカシ』に出会える場所

清水靖枝

横浜市長屋門公園歴史体験ゾーン運営委員会事務局長

『ムカシが来た』これは瀬谷区阿久和の地に、200年前の古民家が泉区より移築された復原記録映画のタイトルである。

今、この『ムカシ』に会いに多くの人々が来園する。長屋門をくぐるのもうそこは『ムカシ』の世界。茅葺きの屋根に広い縁側。どっしりとした3本の大黒柱に見事なまでに張り巡らされた数本の梁。毎日火が炊かれている大きな囲炉裏、四斗の大釜が置かれている籠。「ムカシ」に溶け込むのに必要なものがそこにはある。

しかし、ただそれを遠巻きに見学するだけでは本当の『ムカシ』には会えないだろう。視覚だけではなく、すべての感覚を使って初めて『ムカシ』

に会え、「ムカシ」を感じるのである。正月の「七草粥」に始まり、「蔵開き」「講玉づくりとドンド焼き」、2月3日の「節分祭」...一年を通して催す昔ながらの行事の数々。これらを通して『ムカシ』をより身近なものにして貰えたらと奮闘している。

実は、この奮闘をしているのは私共スタッフだけではなく、多くのボランティアの方々なのである。「ムカシ」に会いに来て『ムカシ』を大切に思う心が生まれ、何時の間にかそれぞれが出来る事をやる。ごく自然の成り行きのように...

利用する市民が「自分たちの施設である」という感覚を持ち合わせられるような運営が大切と常々思い、その任に当たって来た今、お陰様で長屋門公園は確実に市民のものになりつつある。その為なのか、施設にありがちな落書きや破損といった悪戯が開園以来全くといってよいほど無い。

年平均3万人の人が平成の『ムカシ』に会いに来る。一度この『ムカシ』に会うと魅かれるものがあるのか、再び門をくぐる人が多い。「ムカシ」案内人としては嬉しいかぎりである。「ムカシ」が人々を結びつける、ある意味でのコミュニティの拠点にもなりつつあること長屋門公園、新しいまちづくりが展開されることを希望しつつ『ムカシ』案内人とつとめるのである。今日は近隣の小学校から100名近い可愛いお客様。そろそろ賑やかな声が聞こえてくるだろう...



旧安西家主屋内部



ムカシに会える空間

横浜市長屋門公園古民家復原の記録映画

『ムカシが来た』

が優秀映画作品賞を受賞

横浜市長屋門公園歴史体験ゾーンの古民家復原記録映画『ムカシが来た』が、文化庁が毎年選定している優秀映画作品賞(短編映画部門)を受賞している。

この賞は、日本映画の中から優れた作品を顕彰し、映画芸術の向上と発展に役立てることを目的として、平成2年度に文化庁が創設した賞で、毎年1度選定作業が実施されている。

映画は、旧安西家の移築復原作業を中心に、旧大岡家長屋門の修復作業等を記録したものだが、単なる記録映画に止まらず、瀬谷区阿久和町周辺の環境の変化や現在の状況、長屋門公園歴史体験ゾーンのもつ意味といったメッセージを縁側としながら、作業に携わった職人さんたちの技と心意気に焦点をあてている。ゆったりとした構成は、そのまま横浜の原風景を流れている時間と重なるようだ。

脚本演出の松川八州雄氏は、ベルガモ映画祭芸術部門大賞やニューヨーク国際映画祭銀賞、国際工芸グランプリ、その他数多くの賞を受賞しているドキュメンタリーの大家。ナレーションは女優の浜美枝さんが担当している。上映時間は46分。しっとりとしたカラー映画に仕上がっている。

個人への貸し出しはしていないが、鑑賞を希望する団体は、横浜市都市計画局都市デザイン室に相談してほしい。VHS方式のビデオテープに移したものが用意されている。

都市デザイン室 ☎045-671-9850



謎の旧第一銀行 横浜支店の設計者

長島重明 (清水建設株式会社)

一昨年12月、旧第一銀行横浜支店が移築復原のため解体されることになり、その最後の姿を公開する企画である「歴史を生かしたまちづくりセミナー①」(編集注:テーマ「日本の近代化を支えた横浜の銀行建築」)に参加した。

そこで驚いたのは、当日の資料にはこの建築の設計者が西村好時になっていたことで、当社では戦後に副社長までなった小笹徳蔵の設計とされていたからである。

西村好時は明治45年東京帝国大学工学部建築学科を卒業し、日本建築株式会社、曾禰中条事務所在籍した後、大正3年に清水組に入社、主に第一銀行の建物を担当していた。大正9年に第一銀行の建築課長として転出、昭和6年に西村建築事務所を開設するまで、第一銀行の本支店の設計を全て担当している。いずれにせよ当社にとって縁の深い情熱がそのまま伝わってくるものがあり、横浜市がこの建物の移築復原を決定したことに敬意を表したいと思う。当社としても、今回の工事で解体処分される部分を、一部当社の建設資料館の資料として引き取らせてもらった。

その後しばらくすると移築復原の工事をしている竹中工務店の内田所長より「3階の天井裏から棟札が見つかり、それには『設計並施工合資会社清水組』と書いてある。』との連絡が入り、翌日借



発見された棟札(表)

(裏)

り受けに行った。その日は「歴史を生かしたまちづくりセミナー①」の開催日で、会場に来られていた横浜国立大学の吉田鋼市助教授や横浜市都市計画局の浅見さんにも現物をお見せすることができた。

西村好時は、昭和8年に出した『銀行建築』の中で、この建物の設計は清水組設計部と書いている。しかし、昭和24年に出された『西村好時作品譜』では、西村好時・小笹徳蔵協同設計となっている。当時の設計図書は建築図と構造図が当社に残されており、その中では合資会社清水組設計部設計とあり、主任八木の印が押してある。八木とは、西村好時が清水組に在籍した際に第一銀行の広島支店、函館支店を一緒に設計した八木憲一である。

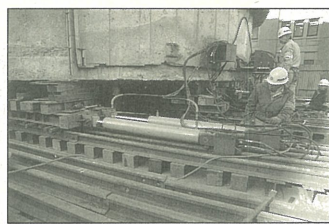
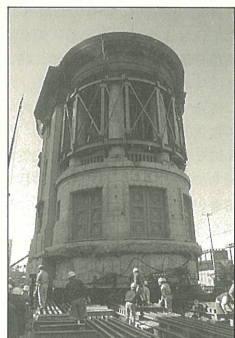
当時設計部であった小笹徳蔵は、大正13年に欧米を視察してスパニッシュ建築の影響を受けて帰り、第一銀行横浜支店をスパニッシュで設計したところ、佐々木頭取から「私はその設計は嫌いです。銀行は柱の立ったようなものと考えられたいやだ。」と言われ、設計をやり直している。恐らくこの実施設計に至る段階で、西村好時と小笹徳蔵は大いに口を争ったものと考えられる。従って、基本設計は西村好時と小笹徳蔵、実施設計は清水組設計部とするのが妥当と思われる。

歴史的建造物が動く! 旧第一銀行横浜支店の曳家

旧第一銀行横浜支店の建物は、北仲地区の再開発事業のなかで移築復原して活用することになっており、既に旧営業室にあたる部分は解体されて重要な部材が保存されている。

これまでスナコ式円柱が印象的な玄関部分が発見されたが、再開発事業及び地下鉄などの公共事業の進捗に伴って移動させる必要が出てきたため、約170メートルほど曳家されることになった。

建物の一部のみというアンバランスな曳家作業のうえ、総重量1,315トンもある建物を、さらに4メートルほどジャッキアップするため、バランス



「曳く」というより油圧で“押す”

をとることが非常に難しくなっている。横浜ではこうした歴史的建造物の曳家は珍しい。移動量は1日20〜30メートルで、作業は平成7年2月初めから1カ月間ほどの予定。

作業は慎重に進められる

中区滝之上に震災前の洋館を発見! 丘の上の洋館『杉浦邸』

平成5年6月、梅雨のあいまの晴れた暑い日の午後、探偵団のように歴史的建造物の調査に歩きまわっていた横浜市都市デザイン室の職員は、暑さのためか予定のルートから外れて誘い込まれるように緑豊かな滝之上地区の丘の細道に分け入っていた。目指す建物に続く道はひとつ先の路地であることに気づいたその時、ふと見上げるとブルーのペンキが鮮やかな下見板張りの外壁と縦長の上げ下げ窓をもつ建物が目に飛び込んできた。明らかに洋館の特徴を示している。即座に予定変更して建物の玄関に向かった。



杉浦邸 玄関側の大窓が特徴

この建物は、根岸・磯子の海浜を見下ろす高台に連なる丘の中腹にあるが、周囲からは隔離されているために発見が遅れた。課設台帳によると大正10年の築となっており、震災前の住宅建築として貴重な存在といえる。

所有者の杉浦さんによると、昭和6年(1931年)頃にはヨーロッパの小国の大使の自邸として使用されており、その後もカナダやスウェーデンの方が住んでいたとのこと。昭和22年(1947年)に杉浦さんの親族の手にわり、以来適切に維持管理し、丁寧に住み続けていらっしやるようだ。

木造平屋(一部2階建)の建物で、下見板張りや上げ下げ窓など洋館に共通する意匠の要素をもつ。増改築のためか和風意匠も散見できるが、全体としては当初の姿をよく伝えている。

庭に面した低層部の玄関脇に大きいガラスを使った印象的な大窓がある。創建当時から意匠だそうだが、当然ながらガラスは外国製だった。この大きな明るい窓から美しい芝生の庭越しに眺める根岸湾はまさに絶景だったことだろう。

木骨煉瓦組積造の倉庫を発見!

中区長者町に赤煉瓦倉庫がある。時の流れを静かに見つめるようなその佇まいは、商店街の賑やかさと対照的にひっそりと建っている。外壁に絡みつく蔦が古びた煉瓦の風合いを隠していたこともあって、この控えめな歴史的建造物を見ることができた。

現在もこの倉庫をお使いになっている株式会社シゲタ菓子店のご主人重田綱雄さんによると、「湯屋火事」で店が焼けたため、再建に際しては火災に強い建物にしたいということで、煉瓦造で店と倉庫を建てたとのこと。倉庫に残された墨書によれば大正10年(1921年)4月のことであった。その後、震災で店は壊れてしまったが、この倉庫は命をとりとめて現在に至った。

この倉庫のように木の骨組みを構造体として、その周りに煉瓦を積み上げていく建て方を「木骨煉瓦組積造」と呼ぶが、横浜に残されている歴史的建造物としてはあまり例がない。知られている例では横浜市指定文化財の地蔵王廟がある。いずれにしても、屋根は和瓦で葺かれ、小屋組は洋小屋(真骨小屋)で組まれるという2階建のこの倉庫は、創建時の状況をよく示す洋の技術によって建てられており、建築面積約50平方メートルという小柄な体ながら、激しい時代の変化に耐えてきたことは間違いない。命運長久を祈るばかりである。



倉庫正面 扉は交換されている

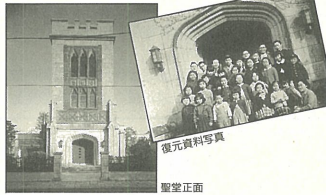
こだわりの一品 横浜山手聖公会 聖堂玄関照明ブラケットの復元

横浜山手聖公会聖堂修復工事の完了と聖堂のライトアップ計画については前号に掲載したが、その後の状況をお伝えしよう。

聖堂の修復工事が済み、後補されていた玄関側の屋根も外されて創建時の美しい姿を取り戻した横浜山手聖公会の建物は、位置的にも意匠的にも山手地区のランドマークと呼ぶにふさわしい歴史的建造物といえる。だが、修復が終了した時点で、玄関周りが何となく物足りなく感じることが指摘されていた。古い写真に写っている玄関照明ブラケットが見当たらないことが、その原因であることはすぐにわかった。何とか玄関照明ブラケットを復元したい。修復作業の最後の仕上げがこの復元作業だということは、作業に携わった関係者の一致した思いだった。そして、復元するなら資料を分析して、可能な限り創建当初の姿に戻そうと考えた。そこで、教会の方々に古い写真などの資料を探していただいたところ、ついに本号に掲載した写真を発見した。

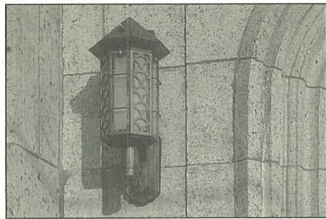
こうして、配線の方法や電気容量の設定、排熱などに若干の課題は残したものの、関係者の熱意によって見事に玄関照明ブラケットが復元された。この玄関照明も演出に役買ってライトアップ計画も実施に移された。

現在、山手聖公会は昼も夜も山手地区のランドマークになっている。



復元資料写真

聖堂正面



復元されたブラケット

洋館には花がよく似合う '94 クリスマス ハウス ツアー 洋館とフラワーアレンジメントの ミニツアー

巷に赤と白のディスプレイが目立ち始めた昨年の12月2日のこと。山手のイギリス館と松原邸には一足早いクリスマスがやってきていた。

清泉女子大学講師で花卉文化研究会代表の杉原たまえさんが企画した「'94 クリスマス ハウス ツアー」が開催されていたためだ。このツアーは、ヨーロッパに古くから伝わっているクリスマスの花の飾りつけを、異国情緒漂う山手地区の洋館で体験してみようという企画で、同時に横浜山手地

区の歴史的建造物の魅力も味わおうという少しだけ贅沢なツアーだ。

会場となったイギリス館と松原邸は、ともに昭和初期に建てられた洋館で内部の意匠もよく保存されている。ご存じのとおり、イギリス館は横浜市の施設で市指定文化財。松原邸は「歴史を生かしたまちづくり要綱」に基づく認定歴史的建造物となっている個人宅。伝統的なフラワーアレンジメントの器としては申し分ない。

ツアー参加者のお一人、松原邸を訪れた石井礼子さんは、「こうした古いお宅の中に入ること自体が初めてですし、アンティークな部屋がフラワーアレンジメントで華やかに飾られてとても奇麗で、感激しています。」と感想を述べてくれた。「友達にも是非見せてあげたいから。」と一生懸命にカメラのシャッターを押していた。



イギリス館



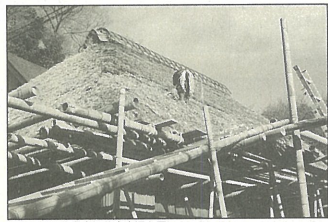
松原邸

横浜市認定歴史的建造物 藤本家住宅旧主屋の改修工事が 実施される

横浜市鶴見区馬場二丁目の藤本家住宅旧主屋の屋根の茅葺き替えと庭の外構工事が実施されている。今回の工事では、庭の東屋の修理も行われる。

伊勢神宮を手掛けたという熟練した職人さんは、福島県から出向いて来ている。奈良県から取り寄せた茅を使用して行う今回の改修工事によって、茅葺きの古民家の美しさがまたひとつ甦ることになる。

歴史的建造物の保全活用には、全国から技術と素材を結集させなくてはならなくなっている。伝統的技術と素材の継承は、やはり早急に解決すべき課題といえよう。



茅葺き替え作業中の藤本家旧主屋

エリスマン邸など6棟認定 認定歴史的建造物は合計21棟に 山手21番館は市指定文化財へ

横浜市の、歴史を生かしたまちづくり要綱に基づく認定歴史的建造物として、今年度新たにエリスマン邸、松原邸など6棟を認定した。今回認定されたのは、いずれも大正末期から昭和初期に建てられた木造の洋館。

また、平成元年度認定の山手21番館(旧スウェーデン領事館)は、横浜市文化財保護条例に基づく指定有形文化財となり、認定を解除した。これにより認定歴史的建造物は合計21棟となった。



エリスマン邸

ピーティ邸



松原邸

フラワー18番館



宇田川邸

中澤高枝邸

都市の記憶を描く!

あなたは印象派それとも写実派? 歴史的建造物の見方・描き方

◎横浜の都市としての歴史はそれほど長くはないが、その決して長くはない“時”は、流れ去ることなく、静かに蓄積し、圧倒的な濃密さをもって横浜のイメージを形成してきた。

今、そうした横浜の都市の記憶は、その語り部である数々の歴史的建造物たちによって雄弁に語られている。

この語り部（歴史的建造物）たちの言葉を、“描く”という手法で視覚的なメッセージに翻訳し、多くの方々に伝えようとしている人達がいる。

自らの感性で語り部の言葉を受け止め、詩人が詩を書くように、描くという手法を通して翻訳する。翻訳されたメッセージには、透徹した観察者としての感性だけでなく、哲学者の思索、宗教家の瞑想にも通ずるであろう対象物との一体感、一種の“感応”に似た精神の発露としての伝達性が秘められている。

読者の皆さんにも描くことを通じて歴史的建造物との心地よい緊張感のある対話を楽しみ、歴史的建造物のもつ魅力の新たな側面に注目していただきたい。最近、歴史的建造物を描いている方は非常に多い、それだけ魅力に富んだ題材なのであろう。今回の特集では、それぞれ描き方の全く異なる3人の画家にご登場願った。



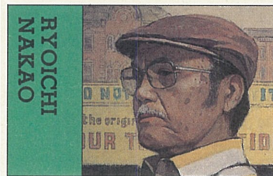
横浜市開港記念会館



神奈川県立博物館



神奈川県庁本庁舎



中尾良一
(なかお りょういち)

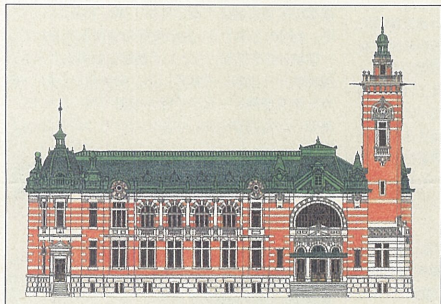
◎1919年ハワイのオアフ島生まれ。東京都大田区在住。1936年に本郷絵画研究所でデッサン修業の後、東京美術学校（現東京芸術大学）に進学、1941年に同校の油画科を卒業された。戦後に横浜税関内米軍キャンに画家として勤務したこともあったが、以後絵を断念された。その後は民間企業の役員として専らビジネスの世界で活躍することになった。1981年に退職してから再び画業に専念されるようになり、現在に至っている。

建造物周辺のさまざまな要素を整理しながら巧みに描き込み、対象

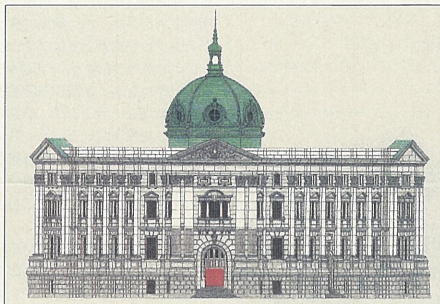
物を引き立たせる繊細な描法は、写真的なパースペクティブをもちながら、決して写真では表現できない、繊細なメッセージを伝えてくれる。

1992年には目黒区美術館にて「消えゆく近代洋風建築100景」展を開催。現在も歴史的建造物に限らず、精力的にまちの風景を描き続けている。

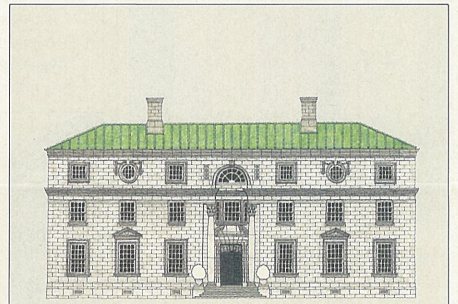
1993年に日貿出版社から「東京・横浜 建築画百景—消えゆく近代洋風建築細密スケッチ—」を出版。



横浜市開港記念会館



神奈川県立博物館



横浜開港資料館(旧館)



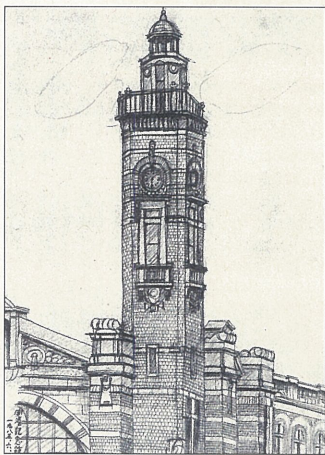
島口暉生
(しまぐち てるお)

◎1940年札幌生まれ。北海道札幌市在住。生家は大正・昭和の両天皇も御覧上になったという明治23年（1890年）創業の馬具製造卸商。絵や文章をかくこと以外にも音楽が好きで、高校時代にはピアノを習得し、青山学院大学在学中は合唱に没頭されていたとか。現在は来生たかおの曲の弾き語りとスタンダードナンバーのピアノ演奏が趣味だ。

「精緻さは馬具製造技術の流れを引く」と作品を自己分析しているが、遠近法による死角の発生すらも排除したいという描法は、建

築の立面図を想起させる一面のみの、歪みのない描き方で、設計図と見まごばかりの精緻な仕上げだ。あくまでフリーハンドで描く細部へのこだわりを、自ら「一線入魂」という言葉で表現している。

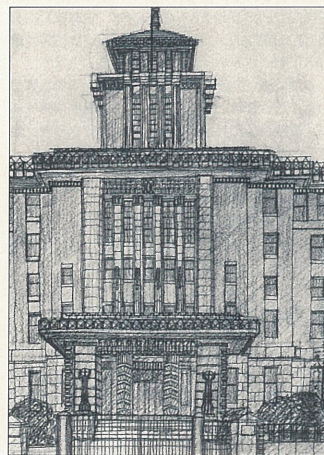
現在、「浪漫地詩図夢」（ロマンチズム）と題して、函館、小樽、札幌、横浜、神戸、長崎といった都市の歴史的建造物を描いたイラストの展覧会を全国で開催している。絵だけでなく、自ら作詞作曲された各都市の浪漫地詩図夢ソングもある。横浜浪漫地詩図夢は神奈川県立図書館に収蔵されている。



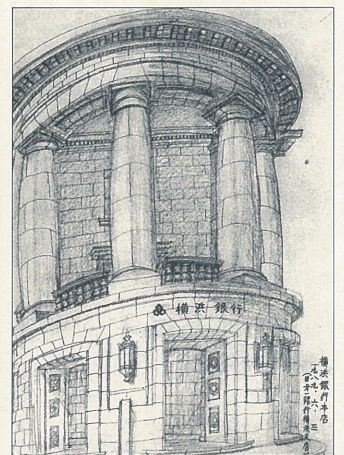
横浜市開港記念会館



神奈川県立博物館



神奈川県庁本庁舎



旧第一銀行横浜支店(南横浜銀行本店別館)



斎藤浩一
(さいとう こういち)

◎1924年横浜生まれ。横浜市旭区在住。母親から、吉浜町でご両親とお兄さんが震災に遭遇し、命からがら横浜公園に逃れたという話を聞かされ、今でも記憶に残っていると述懐する。

絵は和光大学の川添修司教授に師事し、暇をみては油彩で描いていたそうだ。ある日、横浜市開港記念会館を描いている人の姿を見たことや東京駅駅舎をスケッチする機会に恵まれたことで、それまでは気にもしていなかった歴史的建造物に強い興味をもち、有隣堂から出版された「残照—神奈川の近代建築—」（朝日新聞横浜支局編）

の影響もあって、歴史的建造物のもつ魅力に魅入られると同時に、そうした個性豊かな美しい建物が急速に失われていく現実にあづいて、1985年からエンピツによるスケッチを始めた。

建築の秩序に捕らわれず、建造物の印象的な表情を独自の感性で大胆に切り取り、はつらつとした柔らかい線で表現する画風には、人間性までが滲み出た深い味わいがある。1993年には、それまで描いたスケッチを「ヨコハマふるさとスケッチ散歩—斎藤浩一画集—」としてまとめられ、ご自身の古稀の記念として出版された。